

体罰

Middle School Payback by Ned



それは東部にある小さな町の女子中学校での出来事だった。その学校では服装に関する規則が厳しかった。膝下のスカートに白いブラウス、Vネックのセーター以外の恰好は認められていなかった。

その学校で唯一の男性は厳格な体育教師のウォーターズ校長だけだった。プライドが強く、寛容という言葉を知らない三十代終わりの彼は、朗らかな会話や、仲間とお喋りや、微笑みとは無縁の人間だった。彼には生徒たちの遅刻や欠席、好ましくない態度を許容する度量はなかった。そういう彼がどのような罰を生徒に下すのか、親たちの間ではこんな噂話が持ち上がっていた。

「もし、生徒が規則から外れる服装をしたときには、罰を与えます！」

ウォーターズ校長は、PTAの会合で何時もこう発言している。その罰とは、鞭打ちなのだそう。それが嫌なら停学処分が下される。女生徒たちにとって、鞭打ちの刑は普通のことだった。問題は、その鞭打ちのときに何が起るのか、だった。

鞭打ちは、ボイラー室の裏にある、かつては石炭の貯蔵室だったという小部屋で行われる事を、たいいていの女生徒は知っていた。今では、部屋の真ん中にぼつんと椅子が置かれており、穴のあいた叩き籠が壁に掛けられている。その穴は、籠で叩くとき、空気の抵抗を少しでも軽くして早く叩けるようにするために開けられている、と噂されていた。実際のところ、その籠が使われた

ケースを記憶している女生徒はいないのだが。なぜなら、ウォーターズ校長は、平手で叩くのである。

ボイラー室裏手の「熱い部屋」に連れていかれた女生徒は、スカートをまくり、パンティを脱がされる。そして膝まづかされて罰を受ける。ウォーターズ校長は、ときには手で剥き出しになった陰唇を叩く、という噂もあった。陰唇に残った校長の赤い手の痕跡が、何日にもわたって残るとも言われていた。その指が、ヴァギナの中まで侵入してやることもあるそうだ。

今や、規則違反を犯して怒りっぽい校長先生に挑戦しようという女生徒は皆無だった。その日までは……。

ステーションは小柄でスタイルのいい少女だった。砂時計のような女らしい体つきで、背中からみるとほっそりしていたが、乳房は意外なほど豊かだった。肩までのびた金髪を風にさらさらと靡かせて歩くステーションの姿に、ウォーターズ校長は一目で魅せられてしまった。

ステーションは入学したばかりの一年生だったが、ウォーターズ校長からの「罰」を受けた経験をもつ少女たちのグループと仲良しになった。ステーションは、彼女たちが「熱い部屋」でどんな目にあつたかを聞いた。テレサとドリーが陰唇を触られた話。ロマーナがクリトリスを探られた話。ステーションはなんとかしなければ、と思った。ロマーナはいちばんの仲良しだった。彼らはある日、ランチルームで出会い、たちまち意気投合した。ロマーナはステーションより二歳年上で、

校長先生の「熱い部屋での体罰」についての話をたくさん知っていた。

ステーションは、兄とレスリングごっこをやった経験から、男性の睾丸は急所であることをよく心得ていた。あるとき、偶然、彼女の膝が兄の股間に当たったとき、彼は股間を押さえてうずくまってしまったのだ。また、兄の友人たちが家にやってきて彼女のブラジャーの紐を引っ張ったとき、彼女は彼らの股間を膝蹴りしてやった。一人の少年の睾丸をつかんで爪を立てたとき、彼女の豊かな乳房の乳首がぴんと立ったのを覚えている。

ロマーナの話聞きながら、ステーションはそのことに思いをめぐらしていた。

ロマーナに計画を打ち明けた翌日、トレーシーはさっそく遅刻し、ウォーターズ校長に呼び出された。校長はさっそく彼女を「熱い部屋」に連れていった。ウォーターズ校長は短いトレーニング・パンツに盛り上がった筋肉を誇示するジョギングシャツというスタイルだった。部屋に入ると校長はさっそく、シャツはパンティを脱ぎなさいと命じ、トレーシーは従った。彼女は膝まづいて罰を待った。校長の足元に膝まづいたとき、彼のペニスが勃起しているのに気づいた。

すぐにしょんぼりさせてあげる……ステーションは心のなかでほくそ笑んだ。

二度、三度、校長の手が彼女の尻で鳴ったあと、ステーションは校長の脚を叩いて、

「やめて下さい、お願いです、やめて下さい」

と叫んだ。校長は打つのをやめた。同時に彼の指がステシーの股間にすりと入ってきた。彼は、ステシーのクリトリスをまさぐりながら、

「どうした？」

と訊ねた。ステシーは痛さに身をよじりながら、静かに言った。

「やめて下さい」

ウォーターズ校長はぐいと彼女のクリトリスを引つ張り、彼女がびくりと身を震わせるのを眺めながら言った。

「やめる時は、私が決める。……分かったか！」

校長は吠えた。さらに二度、叩いた。ステシーは、手をお腹の下に動かした。そして拳を固め、強く校長の睾丸を殴りつけた！

校長は、股間にハンマーがうち下ろされるような凄まじい激痛を感じた。

「ぐえっ！」

校長は小さく呻いた。顔を怒りで紅潮させ、さらに強くステシーの局部を殴った。パン！と音が響いた。ステシーは苦痛に涙が溢れた。今度は、校長の眼に涙を溢れさせる番だ。ぐしやっ！ 彼女の拳が再び校長の股間に、さらに強く炸裂した。

「ぎゃあああああ！」

校長は叫び、どさりと椅子にくずおれた。ステシーは立ち去ろうとしたが、ウォーターズは

背後から彼女の腕にすがりついた。

「このメス犬！」

彼は吠えた。

「この報いは受けてもらうぞ！」

ステシーは右足を後ろに跳ね上げ、踵を彼の股間に思い切り打ち込んだ。彼は苦痛に悲鳴をあげた。ステシーの腕から手を離し、股間を押さえた。彼の顔は恐怖で真っ青だった。

「あなたこそ報いを受けるべきよ、校長センセ」

ステシーは言った。

「あなたが、生徒たちにやってきたことのね」

彼女は、彼に背を向け、パンティを拾おうとかがんだ。そのとき、ウォーターズが立ち上がった。ステシーは振り返り、立ちすくんだ。彼はステシーに襲いかかり、その豊かな乳房をぎゅつとつかんだ。彼は手に力をこめてねじりあげた。あまりの苦痛に乳房が破裂しそうだった。

と、みるみるウォーターズの顔が青ざめ、両手がだらりと垂れ、トレーニングパンツの下の睾丸にあてがわれた。彼の背後にいたのはロマーナだった。

ロマーナは、ステシーが危険な状況に陥ったら助けに行こうと、ドアの鍵穴から内部をのぞいていたのだ。そして、ステシーのピンチを見るやいなや、部屋に忍び入り、拳を固め、後ろから彼のすでに傷めつけられた睾丸を目掛けて振り上げたのだ。

新たに現れた少女に鞆丸を握りしめられて、校長は動くことも出来ず、ただ苦痛に悶えているだけだった。ローマーナは厳しい口調で言った。

「借りを返してもらうよ、この金玉野郎」

彼女は、掌のなかで彼の鞆丸を弄んだ。左右の鞆丸に親指の爪を交互に立ててのめりこませながら彼女は続けた。

「こいつの金玉、トマトみたいに潰してしまわない？ ステーシー、手をかして」

ローマーナが微笑みながら言った。ステーシーは椅子に座り、

「ウォーターズをこれえ。これより罰を与える」

と宣告した。ローマーナは鞆丸を引っ張ってステーシーの足元まで連れてきた。ステーシーは、びしゃっ、びしゃっ、と彼の股間を叩いた。

「これでもう使えなくなるね」

ステーシーはローマーナに言った。

「手を離して。あとは私が仕上げるから」

ローマーナは、ぐいと鞆丸を思い切り下に引っ張ってから手を離し、すばやくトレーニンングパンツをずりおろした。彼の腫れ上がった鞆丸が剥き出しになった。ジョギングシャツも脱がせてから、彼をトレーシーの方に押し出した。

ウォーターズ校長はうわ言のように言った。

「もし、ここでやめてくれたら……誰にも……言わない。だから……」

「やだね」

ステーシーは言った。

「まだお仕置きは終わってないの。それが終わったら、ここで何があつたかみんなに触れてまわるつもりよ。そうになったら、あんたはもうおしまい。悪い噂が一人歩きして、多分学校はクビになる。そうだったら、もっとマシな学校になるでしょうしね」

それとも……と彼女は続けた。

「ま、待て。正気に返ってくれ。そもそも規則というのは……」

彼女の腕が飛んだ。拳が正確に校長の股間に垂れ下がった果実を打ちのめした。

「ぐえええええええ！」

校長が咆哮した。激痛が全身を駆けめぐった。

「私もしてあげる」

ローマーナが、校長の鞆丸を膝で蹴りあげた。ローマーナは何度も何度も、その男の象徴を蹴りあげた。男性としての能力を奪い去ってしまうまで、膝蹴りをやめそうになかった。ウォーターズの視界が暗くなり、部屋じゅうを星がかけめぐった。

残酷な折檻の後、二人の少女はそれぞれ一つずつ鞆丸をつかみ、全身の力をこめて握りしめた。

やがて、鞆丸はこごごに砕かれ、陰囊はべちゃんこになってしまった。校長は意識を失い、だ

らりと床につっぷして動かなくなった。

少女たちは教室に戻っていった。二人はそれぞれクラスメイトたちに、自分の掌のなかで男の
睾丸が潰れたときの感触を、話した。

ウォーターズ校長は長い間、学校に姿を現さなかった。復帰してきたとき、すでに彼は別人の
ように変わり果てていた。